

## 同級生兄妹

登場人物

主人公…掛布正広

妹…江川沙織

正広父…掛布昭徳

沙織父…江川繁

正広母…掛布系枝

沙織母…江川蛇子

彼女…高崎南

一部 始まりから別れ

俺の親父は元々は関西出身だが、高校卒業時の就職案内で決めた会社が関東だったので、栃木県の小山市に引っ越し、今俺達が住んでいる埼玉県は幸手の中小企業の工場に務めた。

あいつの親父は東京の大田区で生まれた育ったが、俺の親父と一緒に、高校卒業後に就職のため埼玉県の春日部に移り住み、俺の親父と一緒に工場に同期入社で入ったそうだ。

そしてそれぞれの奥さんとなった母親達も、同じ工場の社員同士と言う典型的な職場結婚のカップルである。

子供である俺達が生まれてからも、二組の夫婦は共働きをしていたが、親父達の給料は高くないし、母親達は俺達の育児のため会社を辞めてパート務めに変えたので、収入は少なく裕福な生活では無かった。

しかし、それぞれの家族は庭付き一戸建ての家が欲しいと言う、贅沢な願望を抱いた。それで仲の良い同僚の親達は、会社の近くに二世帯住宅を建て、

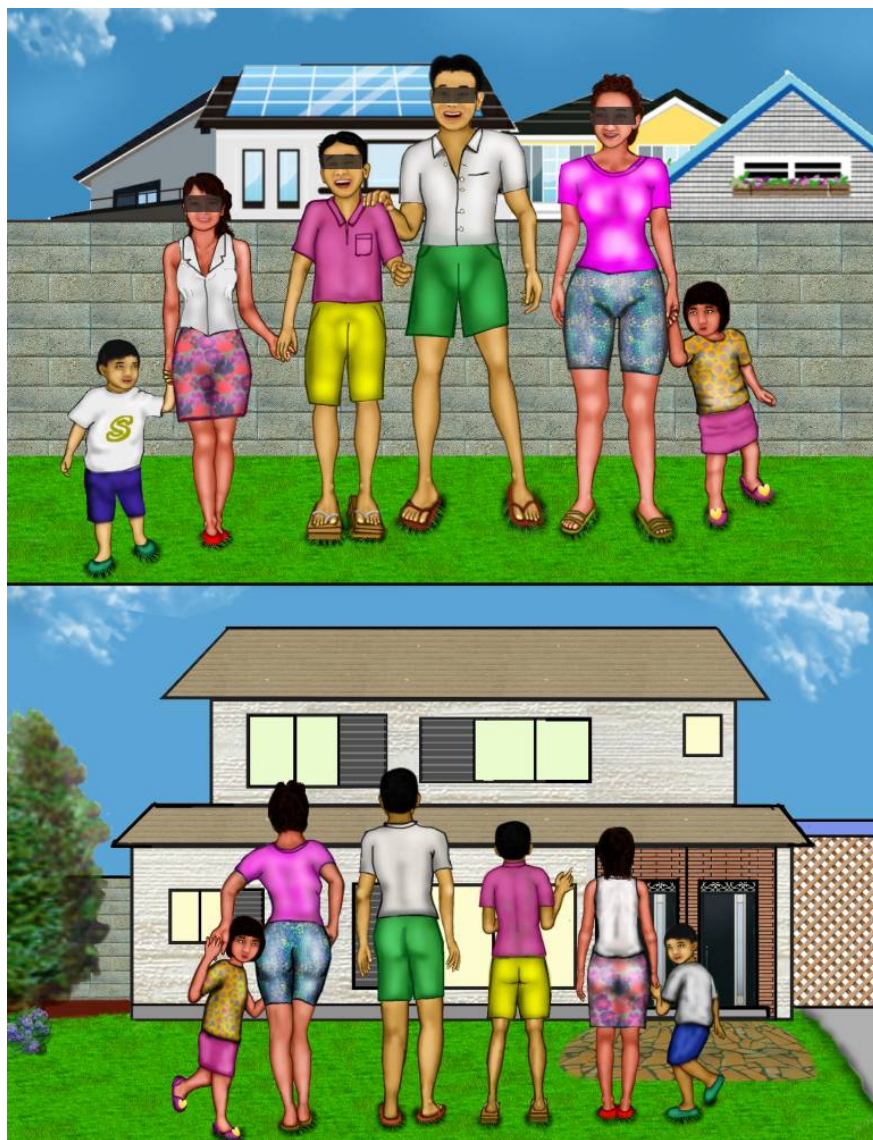
一緒に住めばローンは半分づつで済むと考え、それを実現したのだ。

子供も2人、3人と生めば養育費が掛かるので、1人だけと決めていた様だ。しかし、1人っ子は我ままに育つと言う世間の一般の話もあるため、

親達はお互いの子供を兄妹の様に育てることで、相手の事を考えたり、思い遣りがある子になり、身勝手な人間にだけは成らないだろうと考えた。そしてその事がこの話の発端となったのだ。

繁 「終に出来たな俺達の家が」

昭徳 「ああ、やったな！」



糸枝「正広く今日から沙織ちゃんを妹だと思って仲良くしてね！」

正広「いもうと・・・？」

蛇子「沙織も、今日から正広ちゃんと兄妹になったのよ！」

沙織「マータン・・・？」

昭徳「じゃく予定通り俺達が2階の方で」

繁「ああ、じゃく引越し始めるか！」

そんな経緯で俺が2歳の時、俺より一月遅れで生まれたあいつと同じ家に住み、日々の生活は全て二人一緒に、兄妹の様に育てられた。  
二世帯住宅なので、玄関と台所やリビングは別にあるが、家の中は行き来して、風呂は一つだし、ご飯も一緒に作った方が、手間が掛からず安上がりと言うことで、二つの家族は同じ食卓を囲む事が多かった。

俺とあいつは、遊ぶのは勿論だが食事や寝る時も一緒に、お風呂にも一緒に入った。

沙織「マータンにはパパと同じのが付いてんだ！」  
正広「タオリには付いて無いのか！？あれ！？お股が切れてるじゃん」  
沙織「違うよ！ここからオチッコが出るんだもん！」  
正広「へーオイラのオチッコはこのちんちんから出るんだぞ！」  
沙織「良いな」



幼かった二人は、どちらかの親と一緒に風呂に入り、  
お互いの体を見ても、男と女の身体の違いを不思議に思うだけだった。  
幼稚園に通う様になると、親の姿を真似してままごとを遊びをしたり、  
鬼ごっことか、プロレス等の遊びをしたが、その頃から俺たちに、体格の差が出て  
来ていた。

沙織「パパは早く家に帰って来ないとダメでしょ！」  
正広「もうままごと遊びは止めて、外で遊ぼうよ！」

沙織「何言ってるの！大きくなったらマータンをお婿さんに貰おうと思ってるのに、れんちゅうしておかないと・・・」

正広「違うよ、サオリがおいらのお嫁さんで来るんだよ！」

沙織「タオリの方が強いんだもん、マータンの方がお婿なんだよ！」

正広「オイラの方が誕生日が早いし、お兄ちゃんなんだ！」

サオリがお嫁さんだよ！」

沙織「そんなの関係無いもん！」

チュ！



正広「何すんだよ！」

沙織「ママは、パパがチュウしたからお嫁に来たんだって！」

正広「そうなの？」

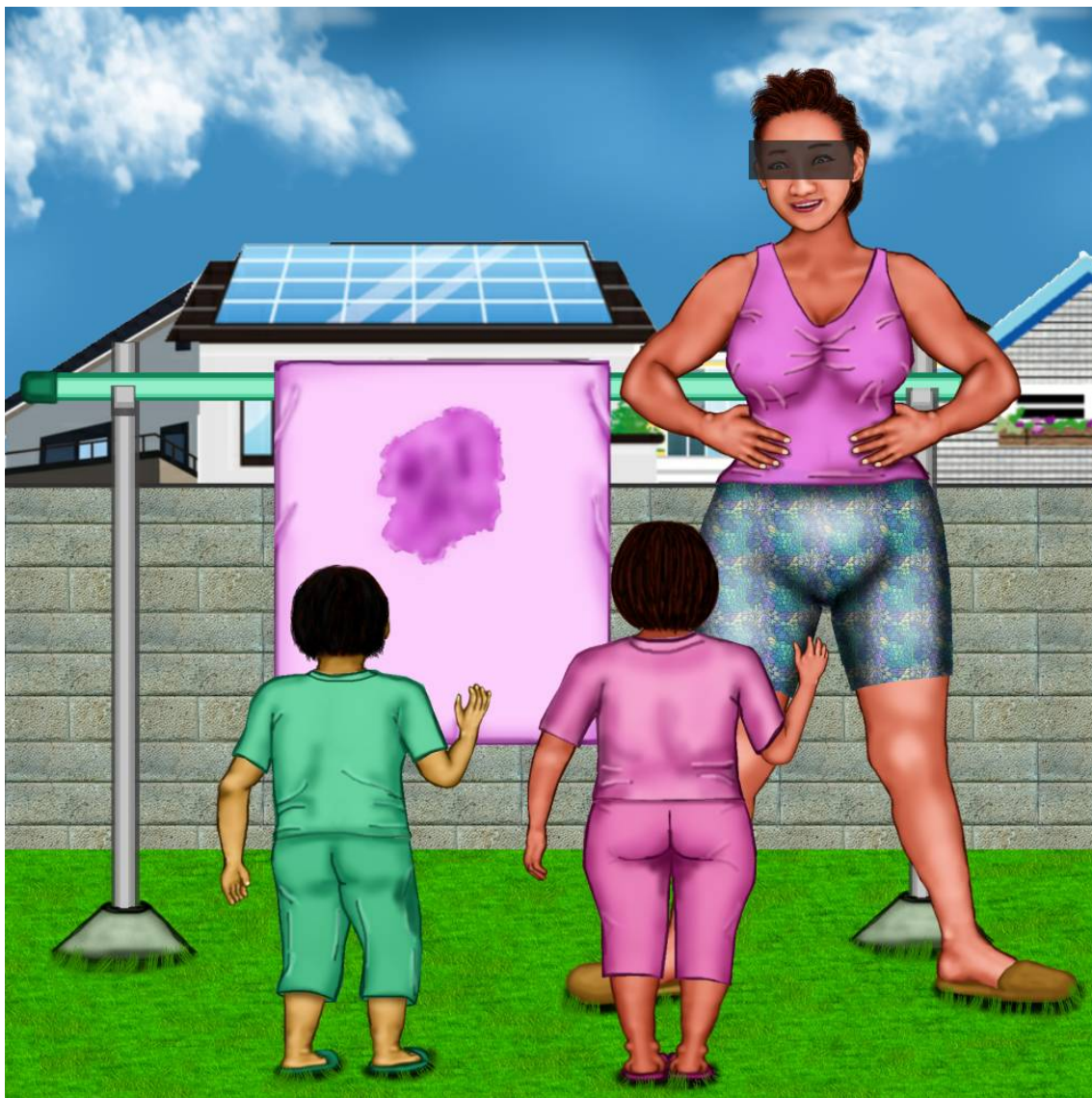
沙織「だからチュウした方が貰えるんだよ！ママが言ってたもん」

正広「じゃーおいらにもチュウさてよ！」

沙織「ヤダよーだ！」

未だ幼かった俺達は結婚の意味も解からず、  
当然の様にあいつが女であることを意識したことは無かった。  
幼稚園までは同じ布団で一緒に寝て、怖いTVを見た後や雷が鳴り響く夜は、  
お互いに肩を寄せ合い、二人して振るえながら眠りに付いたものだ。  
別々の布団で寝ることになったのは、もう直ぐ小学生と言う時に起きた  
おねしょ事件が切っ掛けだったと、薄っすらだが記憶している。

虻子「どっちがお漏らししたのかな？」  
正広「おいじゃないよ！サオリだろ」  
沙織「違うもん、サオリじゃないもん！」  
正広「じゃ〜今度から違う布団で寝ようよ！そうすればハッキリ判るから・・・」



数日後、親が二段ベットを買ってくれて、別の布団で寝ることにしたが、

その後は俺もあいつもオネシヨはせず、結局どっちが漏らしたのかは、ウヤムヤになってしまった。

もしあの時、俺が別の布団で寝たいと言わなかったら、俺達は小学校に入っても同じ布団で寝ていたのかも知れない。

その後、幼稚園〜小学生と育って行く俺達は、沙織が女で成長が早いこともあるが、親からの遺伝もあり、俺と沙織の体格は随分違って来た。

学校で背の順に並ぶと、俺が一番前で沙織が一番後ろだった。

些細なことで喧嘩をしても、俺は沙織に全く刃が立たなく成っていたが、仲直りは早かった。

沙織「それあたしの」

正広「へ〜スワップの中居って、何処が良いんだ!？」

沙織「じゃー桃色レディーの何処が良いのよ!？」

正広「返してよ〜ウギヤ〜」

沙織「へ〜へん〜だ、あたしには勝てないでしょ!」



正広「わ〜ん」

沙織「あれ〜手を踏んでた、メングメング」

親達の企みで俺たちを兄妹の様に育てたことが、正解だったのか解からないが、欲しい物が有っても沙織は持っていないと言われると、ライバル心と言うか、自制心が生まれて我慢出来たのは事実だ。

正広「今度の誕生日に自転車買って欲しいんだけど、クラスの半分以上は持ってるからさ」

糸枝「沙織ちゃんは持って無いでしょ！」

正広「う、うん、でも」

昭徳「中学に入れば自転車通学に成るんだから、6年生になってから通学用に使えるのを買ってやるよ！」

しかし親にダメだと言われて二人の部屋に戻ると、相手に愚痴ることは多かった。俺は沙織に対し頭に来ることがあっても、一応女なので暴力はいけないと思うくすぐり攻撃をしたが、体力勝る沙織が反撃に出て、俺が羽交い絞めにあってしまうのだった。

正広「くそ！サオリが持っていないから、自転車はダメって言われちゃったよ！」

沙織「乗る時無いじゃん、学校には歩いて行くんだし、

それにマー君の身長じゃ、今買ったら子供用の自転車でしょ！？」

正広「うーん、そうかも知れないけど・・・」

沙織「あ、そっか！マー君は足が短いから、歩くの大変なんだよね」

正広「何だとう・・・」

沙織「こら！くすぐりたい・・・アハハハ」

正広「うー」



沙織「お風呂に入っちゃおうか!？」

正広「う、うん」

沙織「あたし今日はお腹が痛いから、お風呂出たら寝ちゃおう・・・」

正広「そうなん?大丈夫!？」

沙織「うん、マー君の体くらいなら洗えるよ!」

その頃に成ると、親と一緒にお風呂に入るのではなく、世間一般の子供が、兄弟同士でお風呂に入る様に、俺達も二人だけで入る様になっていた。幼い頃は親が俺達の体を洗ってくれていたが、相手の体を洗うことで背中や髪の毛、足の裏など隅々まで洗えることもあったし、何より相手に洗って貰うと嬉しく感じたので、お互いの体を洗う様になっていた。そんな中俺は、胸の膨らみが出てきた沙織の体が少し気になる様になって来ていた。

正広「大体ズルいよね!」

沙織「何が?」

正広「俺の方が洗う面積が広くて、サオリの方は俺よりずっと楽だろう」

沙織「マー君が早く大きくなれば良いんじゃない!」



正広「あ!血が・・・」

沙織「あれ?!なんだろう?おかあさくん」

沙織は初潮だった。

小学校の高学年に成れば、初潮が来るのはごく普通で当然のことではあるが、その時の俺達には解からなかった。

その後沙織は俺に氣を使つて、俺が血を見るのは嫌だろうと言い、生理の時は別々に風呂に入る様にしてくれた。

俺としては、体を洗つて貰えないのは残念だし、毎日沙織の裸を見たり触りたいと言う思いも生じていたが、生理の日は月に2、3日程度だし、自分の体を洗う方が楽なので、どちらでも良いと思つた。

小学校も卒業の年になったが、これも親の遺伝なのか？お互いに勉強は出来る方では無かつたし、当然の様に公立の同じ中学に進んだ。

中学に入ると、沙織は大きい体だったこともあり、部活動はバレー部に入った。俺はと言うと、相変わらず背はあまり伸びなかつたが、運動神経は良い方だったので、部活動はやはり運動部のバドミントン部に入った。

どちらの部もあり強い学校では無いが、それなりに練習はしていて、夜の8時まで練習することもあり、隣のコートで練習していた俺達は一緒に帰ることが多かつた。

学校で俺達の仲が良いと言う話はあつたが、クラスの皆は、俺達と同じ家に住んでいて、兄妹同然の生活をしてる言う事情を知っていた事と、男と女の関係と言うには身長の違いがあり過ぎるので、体格的に不釣り合いだから好き合うハズは無いと思われていたので、変な噂になることは無かつた。しかし家に帰ると同じ部屋で寝ていたし、お風呂にも未だ一緒に入っていた。考えて見れば当然ではあるが、性に目覚め始めている二人の男女が、血の繋がつて無い相手と同じ部屋に寝ていて、お風呂にも一緒に入つてお互いの裸を見ていれば意識しないハズが無い。

胸が膨らみ陰毛も生え、女らしいS字曲線を描く沙織の大きい体は、大人の身体だった。それに比べ、やつと陰毛が生初め、小さく華奢な俺はまるで子供だ。しかし思春期を迎え、当然の様に子供が生まれる仕組みやSEXのことも知り、好奇心と欲望が芽生えてる俺は、沙織の体を意識せずには居られなかつた。

沙織「部活でいっぱい汗かいたから、よく洗つてよ！」

正広「う、うん、」

この頃の俺は、脱衣所で服を脱ぐ沙織に色気を感じていたし、女の部分に凄く興味を持っていた。

沙織「汗臭いでしょ！」

正広「う、うん、先に洗ってあげるよ」

確かに沙織が言う様に汗臭いが、嫌な臭いとは感じなかった。むしろ嗅いでいたいと思う様な、何か良い臭いもしてくる。

沙織「ちょっと、なんでそこは素手で洗うのよ！」

正広「いや、なんかここは、ナイロンタオルじゃ痛いのかと思って・・・」

沙織「でもタオルで良いよ！なんか変な感じがするから・・・」



俺は女のアソコが敏感なことは知らなかったが、肌とは違う部分をボディー洗い様のナイロンタオルで洗って良いのかも迷ったのと、その部分を触って見たいと言う思いにかられ、初めて素手で洗って見た。しかし沙織は嫌だったのか、タオルを使う様に言ってきた。

その頃の俺は、沙織が俺のちんちんを洗う為に握ると、自然に勃起する様になっていたが、その日は触られる前から大きく成ってしまった。

沙織「あれ何？触ってもいないのに大きくしちゃって!？」

正広「ん、あ、ちょっと触らないでよ！」



沙織「掴まないと洗えないじゃん！」

正広「ダメ〜！」

沙織「何怒ってるの？」

沙織に勃起したちんちんを掴まされると、オシッコか何かが出てきそうに成った。普通のオシッコなら当然止めることが出来るのに、何故か止められない感じがして、このまま出したら沙織に掛かってしまうと思ったので、慌てて沙織に触るのを止める様に怒鳴った。

正広「なんか触られるとオシッコが出ちゃいそうなんだ・・・」

沙織「え〜あたしにオシッコかけないでよ！」

正広「解かってるよ！先に出てくれないかな〜」

沙織「うん、でもお風呂でオシッコしないでよ！」

正広「う、うん」

何とか出さないと止めたものの、さっきは凄く気持ちが良い感じだった。

俺は沙織を先に風呂から出し、続けて触ってみたかったのだ。

そして沙織が風呂から出ると早速自分のちんちんを掴んで見た。

直ぐにさっきの気持ち良い感覚が戻ってきて、それと同時に沙織の体が頭に浮かんだ。

そして手で擦ってみると更に気持ち良くなり、もう止めることは出来ない、

終にちんちんの先から、オシッコとは違う白い液体が飛び出た。

正広「ううゝ出る！あ」

それは俺の精通であり、最初のオナニーだった。

次の日からは沙織と一緒に風呂に入るのを止め、沙織の後に一人で入ることにした。

もう射精が出来て男の身体になった俺は、沙織が性の対象となる女であると、意識せずには居られなかったのだ。

沙織と一緒に風呂に入ろうと言うが、俺は断った。

沙織の方は小学校5年で初潮が来て、俺より随分早くに大人の女の身体に成っていたのに、俺とお風呂に入るのを嫌がる所か、未だ一緒に入ろうと言って来る。

俺の方が沙織より少し早く生まれたが、俺は小学生と同じくらいの体格で

沙織よりずっと小さいし、沙織から見れば俺は幼い頃のままで、

性の対象となる男とは意識出来ず、弟の様にしか思っただけの無知な男かも知れない。

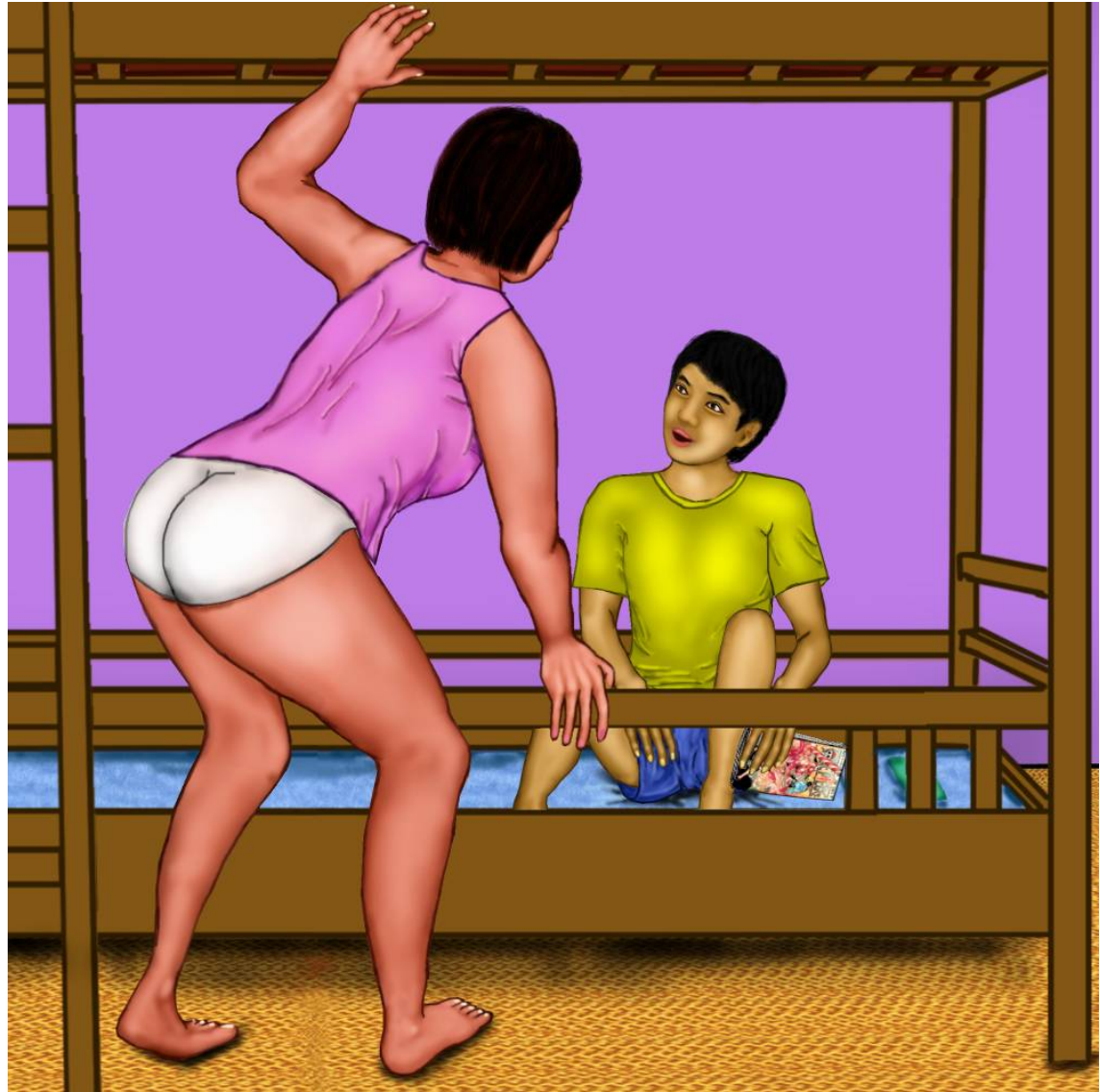
最初の内は見たいTVがあるからとか、宿題するからとか言って断ったが、

その内に言い訳するのが嫌になり、俺は沙織の大きい体を洗うのが面倒

だからと言い放った。

沙織「お風呂は？」

正広「今TV見てるから後で入る」



沙織「今日是一緒に入ろうか？」

正広「もう一緒には入らないよ！」

沙織「え？何で？」

正広「だって沙織の体がデカいんだもん、俺の方が損じゃん！」

沙織「マー君が何時まで経っても大きく成らないのが悪いんじゃない！」

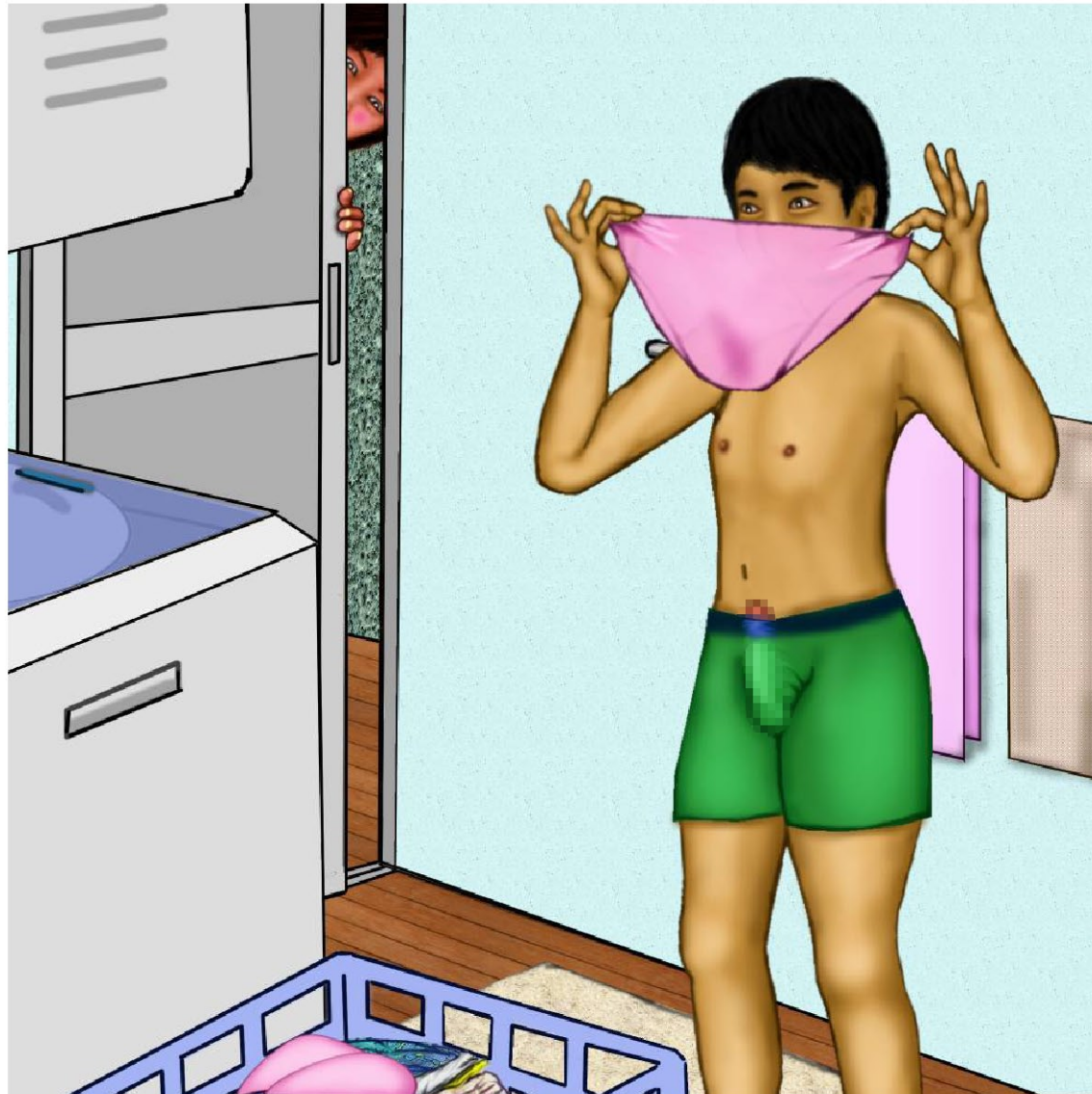
正広「だってしょうがいだろー！沙織がデカ過ぎるんだよ」

沙織「じゃーお互いに自分の体を洗えば良いでしょ！？」

正広「それなら一緒に入る必要無いじゃん！」

沙織「それはそうだけど・・・良いよ、一人で入るから！」

しかし俺には目的があった、沙織の後にお風呂に入り、脱衣所の洗濯籠に入れた沙織のパンツを嗅いで、その後風呂場でオナニーするのが日課になったのだ。



これは随分後の大人になってから知った事であるが、もし俺と沙織が、血の繋がった普通の兄妹だったならば、俺が沙織の裸を見て興奮したり、体に触りたいと言う感情は生じ無かったであろうと言う話だ。人間・いや動物は、生物学上血縁同士の種の保存は、劣性遺伝子の可能性が高くなる事を本能的に解っており、同系交配を避けるメカニズムが備わっているので、親子間や兄妹間で、相手に欲情する人は滅多に居ないと言うことである。

しかし俺と沙織は便宜上の兄妹であり、全く血の繋がりは無い、  
本当は赤の他人であることも知っている。

思春期の俺が、大人の体をした沙織に欲情するのは当たり前のことだったのだ。

中学も2年になると、それなりにエッチな本も見なくなる。  
俺がベットの下に隠して置いた、友達から貰ったHな写真週刊誌を、  
沙織に見つかってしまった。



沙織「何これ！？へーマー君も一緒に女の裸の写真見るんだ！？」

正広「あ！こら返せよ！」

沙織「なに？マー君も女とHしたいの？」

正広「ああ、男だもんしたいよ！」

沙織「いやらしい、やだ、あたしはやらせてあげないよ！兄妹だもん」

正広「大丈夫だよ！俺は沙織みたいなデカイ女は好きじゃ無いから・・・」

沙織「ほんと？じゃー夜中にあたしのベットに入ってきて来ないでよね！」

正広「当たり前だよ！」